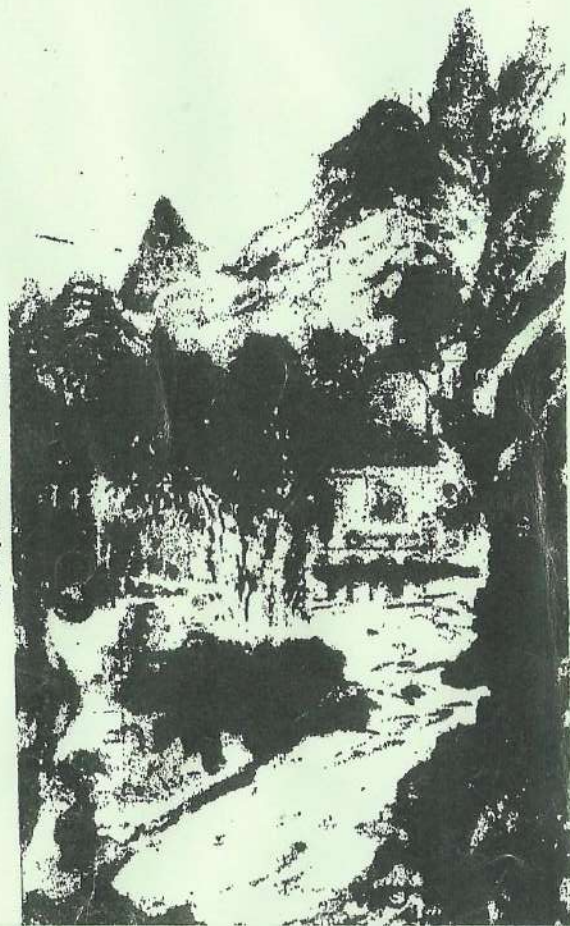


平成二十六年九月発行 (年二回発行)

『湧水』 通巻 第五号

# 湧水



千代田岳精会

自作自詠俳句研修会

夕影の

汀子



花より花へ

移りけり

(まえがき)

俳句を作ってみませんか

鶉飼 てるを

四年前の春、詩吟を習い始めて間もない頃、同じ教場の橋本氏(現在の橋本リーダー)に誘われて、自作自詠俳句研修会に。生まれて初めての俳句作りです。月一回の会では、①自分の句を作り ②先人の句を味わい、そして ③自作の句を吟ずることで俳句作りに馴染んで来ました。私達の仲間の多くは、私同様の方々や、関心は持つていたが、句作りは初めての方々と多少の月日に差はありますが、皆さん平らな立場で句作りを楽しんでいます。

今の私は、五七五の十七文字に一つの季語を織り込む約束事の中に、見たままや、心に感じたままを、事の大小ではなく、率直に詠んでみようと思つています。

「ヨシ上手く出来たぞ」と勢い込んで橋本リーダーに見て頂くと何んと、「季語が三つ重なっていますよ」と言われる次第で、まだまだ未熟者の域を超える事が出来ませんが、上達するよう懸命に勉強しています。

私達の句集「湧水」は今回で第五号が発行されます。私の句作りも、一号から五号までになり、多少は成長ありとひそかに思っております。

みなさま！俳句を作ってみませんか。自作自詠俳句研修会にぜひ御参加ください。

『目次』

(アイウエオ順)

俳号	氏名	頁
故	ひさ	一
蓮花	稲垣ひさ様	二
鳥城	池田康子	三
泰俊	磯田貞二	四
てるを	岩崎泰俊	五
童人	鶉飼輝夫	六
朝香	川口榮三	七
つねこ	河合節子	八
明鐘	神田恒子	九
合風	菊地利廣	〇
智子	小保合介	一
陵人	鈴木重成	二
はる	滝沢はる	三
順治	徳本順治	四

俳号	氏名	頁
たかお	名倉隆雄	一五
千舟	橋本隆一	一六
玄猷	八田豊	一七
みほ	原口美保	一八
壽	藤原壽	一九
をさむ	細川修	二〇
桜子	本多敦子	二一
道人	前田道紀	二二
いくよ	三須以久代	二三
のぼる	耳塚昇	二四
まい	宮野信子	二五
得自楼	湯山徳次郎	二六

故 稲垣ひさ 様 作句

お年玉孫の笑顔に我が過去を

平成二六年一月作

薄氷をつつきて潜る池の鯉

同年 二月作

啓蟄や土饅頭のうごめきて

同年 三月作

追悼の句 自作自詠俳句研修会 会員代表

満面の笑顔も逝きし沈丁花

会 長 鈴木 陵 人

桜蕊君に名残りのかたちかな

顧 問 前田 道人

ありし日の吟声ひびき鳥雲に

リーダー 橋本 千舟

『お正月』

池 田 蓮 花 (康子)

どつと来てさつと帰りしお正月

手をつなぎ薄氷を踏み登校す

雪の中清き一票投じけり

公園の花を頂く童たち

更衣好みのシャツのまとめがい

つゆ空や足取り重き齒科通い

『花うぐい』

磯田鳥城 (貞二)

花うぐい利根の浅瀬に浮動して

天神の筆塚古りぬ藤揺るる

施主そこに主あるごとく春炉焚く

幼子の拳にも似て寒牡丹

庭石の打水乾き学芸員

花冷や旧居隅まで拭き光り

『あじさい』

岩崎泰俊 (泰俊)

あじさいの花に惹れて遠出かな (自作)

梅咲きて白楽天の思ひ知る (自作)

サーフアーかも牛蒡みたいに黒いから (朝日新聞)

難産の老いの一句や夏来る (朝日新聞) 4

小鳥らも熟れるを待てぬさくらんぼ (NHK)

朝虹は雨と言はれてその通り (NHK)

『更衣』

鶉飼 てるを (輝夫)

春の雪色鉛筆でなにを画く

夕間暮れ海棠のなのお艶めけり

水響く若葉若葉の奥山路

へへののもへじ梅雨の車窓の文字あそび

夏蒲団はるかな母の匂ひかな

むき出しの肌の白さや更衣

『静座』

川口 童人 (榮三)

お年玉孫そつとだし爺なみだ

薄氷や波打ち際で盛り上がる

朝の日に新芽ほころび庭の鉢

晩春の山路をめぐり年數ふ

静座して名石ながめ夏の園

車窓から柴陽花ながめ山頂へ

『初詣』

河合朝香（節子）

初もうで茅の輪くぐれば神の庭

能楽堂古りて紅梅よく映る

一灯はそば屋のものか水温む

目で計る春泥十歩路地の奥

調教の馬の背に散る花吹雪

烏衣巷の壁に漢詩の春水路

7

『日本庭園』

神田 つねこ（恒子）

春服のわたしタカラジエン又かな

ばら園や人もあふれて香に酔へり

池べりの雪見灯籠風涼し

音響き見え隠れして滝おつる

梅雨入りや傘をバックに外出す

南天の白き花房雨含む

8

『春服』

菊地明鐘 (利廣)

水槽にあるやなしやの薄氷

雪やんで路地に多少の靴のあと

雪かきや隣の方と挨拶し

春服の樟脳かすかに匂いけり

梅雨晴れや児童の二人じゃれ通る

雨空や南天の花路静か

『嫁ぐ子の』

久保合風 (合介)

嫁ぐ子の部屋の残り香春灯

五月雨や街灯煙る神楽坂

山の端に鳥隠れなむ走り梅雨

秋立や川面賑はふ浮子いくつ

若き日を語り酒酌む月今宵

真っ先に仔犬駆けゆき夕立晴

『初曾孫』

小林 智子 (智子)

初日の出手を合わせをり里の人

岩田帯願いあふるる初ごよみ

初曾孫天に寿ぐ鯉幟

目も病みて悩める夫や冬ざるる

一陣の桜吹雪に身じろぎて

山笑う郡生の木々白くゆれ

11.

『緑！澆漉！』

鈴木 陵 人 (重成)

寝正月決め込む床の抜けられず

遠霞むビルの林や鳥の群れ

覚えたて文字も躍るや卒園児

ランドセル一年生を抱えけり

晩春や冷たき雨に酒を飲む

梅雨何の緑の木々や人力車

12.



『春巡る』

滝沢はる (はる)

吟友の絵手紙届き土筆かな

晩春の訃報の届き空あおぐ

本堂に読経の声や春衣

庭園の雪見灯籠風薫る

夏蒲団抱えて夫は夢の中

バス停や傘のカラフル梅雨に入る

13.

『雑煮椀』

徳本順治 (順治)

亡き父母の想い出つまる雑煮椀

孫集ふ笑顔笑顔のお年玉

山の端に電波塔立つ夕霞

かすみ立つ遠き大島海に浮く

リハビリに出かける妻や春の服

万歩計挑む五千歩梅雨晴れ間

14.

『花筏』

名 倉 たかお (隆雄)

門前の獅子舞い踊りさんざめく

水取りや闇を走りて火玉落つ

山野辺をただ二人行く春の雨

川拓く芭蕉も見しか花筏

一面の蓮枯れ果てて水重し

夏蒲団孫の小鼻をそつと撫で

『梅雨雲』

橋 本 千 舟 (隆一)

大前に氏子の宴お正月

尖塔の立つ高原や朝霞

啓蟄の河原昼餉の一家族

晩春や山のバス停天気雨

洋館の庭に盛りの花薔薇

梅雨雲の一画崩れ薄日さす

『白い石楠花』

八田 玄猷 (豊)

春雪や町中人の姿消ゆ

蠟梅の枝刈り込むなと教へられ

花桃の三色目立つ畠の隅

紫陽花や濡るる姿のあでやかさ

窓際の白い石楠花目に涼し

夏衣孫におしやれと気に入られ

『碁会所』

原 口 み ほ (美保)

木枯らしや嫁ぎし娘偲ぶ母

孫の手に触れし温もり雛祭

読み返す友の絵葉書春の宵

梅雨の猫餌分け合ひて命継ぐ

暑き日や碁会所の友旅立ぬ

向日葵や日射しを受けて咲き盛る

『冬薔薇』

藤原 壽 (壽子)

仮名ひとつ変えて詩となる冬薔薇

十指組む長き祈りの淑氣満つ

根菜の地力をもらふ寒の内

湧き水の音青春のビバルデイ

情熱の暴走も良しおらが春

マグカップ海色に替へ菜花植う

『白藤』

細川 をさむ (修)

里帰り孫たちの占む置炬燵

棚霞生駒の山に朝日射す

庭先の鉄幹に咲く梅の花

春風や池面に遊ぶ親子亀

白藤の天突く如く咲き昇り

鑑真忌ありしの日偲ぶ障壁画

『ゆとり』

本多 桜子 (敦子)

幸多し四代揃ひお正月

はんなりと心を包む霞かな

朝の日のあまねし樹氷林めぐる

春色に服も心もはずみ居り

鮮やかな薔薇に囲まれ我もまた

夏ふとん亡き夫偲びそつと触れ

『花の寺』

前田 道人 (道紀)

大物を仕留鮫鱈の吊るし切り

わが街に雪女郎きて荒れ四日

いたずらのたたされ坊主つくしんぼ

雪下ろし腰を痛めてみつか寝る

迷いみちてふの案内に身を任す

花の寺在りし母識る尼僧哉

『薄氷』

三 須 いくよ (以久代)

健やかに居並ぶ屠蘇の座が遠し

薄氷に写る白雲光りけり

啓蟄の池に水音何ならむ

取り出せる春服どれも萌黄色

みどり帽かぶる園児等ばらに消え

暮れてゆく梅雨の晴れ間に名残りあり

『初空』

耳 塚 のぼる (昇)

初空に八十路の爺の畏まる

薄氷の甕の淵より離れけり

三味の音の袖摺坂に春の雪

啓蟄や友を誘ひて昼間酒

登校の子等を桜花の出迎へり

見回りの猫軒づたひ梅雨晴間

『薔薇』

宮野まい (信子)

一茎に咲きて寄りそひ花薔薇

薔薇見つつふと立ち止まり風そよぐ

北風や囲む食卓鍋の湯気

靴底に知る薄氷みちすがら

夕日背に落ち葉集めて芋を焼く

絣着て友とお参りお正月

『草珊瑚』

湯山 得自楼 (徳次郎)

門飾り裏白に添え草珊瑚

海棠の雨にもめげず咲き誇る

卯の花腐し涙腺細き病てふ

転倒に膝の骨折四月馬鹿

日照雨して遠嶺に懸る虹の橋

紫陽花の毬育ちをり濛雨中

(あとがき)

『俳句論になってしまい・・・ごめんなさい』

久保合風

俳句は、遠く室町時代に盛んだった俳諧の連歌にその起源を發します。以後、日本の自然的・精神的風土の中から「庶民の文芸」として、多数の愛好者にはぐくみ育てられてきました。俳句は今や我國の国民的文化遺産です。

同時に、この四季の変化に富む、美しい風土の中で生活を営んできた私達の感動と感性が喜怒哀楽に応じて「さりげなく」表現される他に例を見ない『世界一短い詩』が俳句の特性です。

この十七文字の詩が持つ可能性が、明治時代にはヨーロッパに衝撃を与え、現在では地球規模での文芸家の再評価が高まっています。

松尾芭蕉や正岡子規の先見性に触れるまでもなく、俳句は国際的に意を強くしている今日この頃です。

先日「嫁ぐ子の部屋に残り香春灯」の句に、シアトルの長女が涙ぐんでいました。俳句には、詠み人の心を清澄にし、聴き人の感動を呼び起こす素晴らしさがあります。だれもが折にふれ胸に浮かぶ感懐を、五・七・五と言うシンプルな詩形とリズムに託すことが出来るのです。

それなのに・・・詩吟も俳句も共に心の味わいを詠み、文字にする兄弟姉妹の間柄なのに・・・千代田岳精会三百余人の会員の中、自作自詠俳句研修会の会員は三十人たらずで淋しい限りです。しかし、うれしいことには、日を追うごとに会員は増えています。みなさん頑張りましょう！

### 自作自詠俳句研修会の行事

(一) 例 会 Ⅱ 毎月第二火曜日午後二時から二時間

基礎研修・自作自詠・句評  
部外講師等の指導など

(二) 行 事 Ⅱ 吟行会・納会・特別研修・その他

(三) 句誌の発行 Ⅱ 句誌の発行は年二回・原則一月と七月

俳句を作って楽しみましょう！

自作自詠俳句研修会へのご入会をお待ち致します



千代田岳精会

自作自詠俳句研修会役員

参与

鈴木陵人 徳本順治

磯田烏城 池田蓮花

岩崎泰俊 八田玄猷

耳塚のぼる 小林智子

菊地明鐘 藤原壽

運営委員

顧問 前田道人

顧問 湯山得自楼

リーダー 橋本千舟

運営担当 本多桜子 久保合風

企画担当 細川をさむ・鶉飼てるを

編集担当 川口童泉